

27	田原	田原市立中山小学校	鈴木 福志
分科会番号	12	分科会名	自治的諸活動と生活指導（中学校）

目指せ ONE PIECE！ ～学級の課題を解決する話し合いを通して～

1 主題設定の理由

現代社会は大きく、また急速に変化しており、将来が不透明で予測困難な時代となっている。このような時代の中で、生徒たちには様々な変化に主体的に向き合って柔軟に対応したり、他者と協働して課題を解決したりする力が求められている。そこで、学級での生活上の諸問題を生徒が自ら発見し、見いだした課題について、互いの意見の違いや多様な考えがあることを大切にしながら、学級としての考えや取り組む活動について合意形成しようとする資質・能力を育むことが重要だと考える。

本学級は、仲間との関わりを大切にしている生徒が多い。積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られ、互いに歩み寄りながら温かい人間関係を築くことができている。その一方で、出された意見の対立に折り合いをつけることが難しく、安易に多数決に頼ったり、合意形成するまでに至らなかったりする場面もあった。また、話し合いの結果に対して納得できず、不満を抱く生徒もあり、決定事項を自分事として捉えられていない様子も見受けられた。このような経験から、自分の意見を表現するだけでなく、仲間の意見に込められた思いを受け止めたうえで、粘り強く対話を重ね、全員が納得できる方策を話し合う力を育てていく必要性を強く感じ、本研究に取り組んだ。

2 研究のねらい

研究を進めるにあたり、次のような「めざす生徒像」を設定した。

- ・仲間の思いを大切にすることができる生徒
- ・よりよい学級生活に向けて合意形成することができる生徒

「めざす生徒像」に迫るために、以下のような仮説と手立てを設定し、検証することにした。

3 研究の仮説と手立て

【仮説1】

生徒主体の話し合いの場を設定することや、互いの考えを共感的に理解しようとする雰囲気を作ることで、仲間の思いを大切にすることができるだろう。

<手立て1> 生徒主体の話し合いの場の設定

生徒主体の話し合いの場（以下、学級会）を設け、学級全体に関わることにについて、互いに考えを伝え合ったり、自分たちで取り組む活動を決定したりすることができるようにする。また、生徒自身が議長や黒板書記などの役割を担う経験を通して、自発的・自治的な活動ができるようにする。これにより、学級全員の考えを生かしてよりよい学級生活に向けた取り組みを話し合うことができるようになるだろう。さらに、話し合いの場では、「友達の話をしっかり聞く」「自分の考えを友達に伝える」など「話し合いの約束」を掲示する。これにより、発言者は自分の意見が相手に受け入れられているという安心感をもち、互いの思いを大切に話し合いをすることができるであろう。

<手立て2> 共感的に理解しようとする雰囲気の設定

学級会に先立ち、「学級会ノート※1」を活用することで、生徒全員が議題に対する自分の意見や、その理由となる具体的な経験や思いを明確に整理することができるようにする。さらに、一人一人が議題に共感したり、自分事として捉えたりすることができるように、提案理由の発表の場面で、議題に対して「自分の思ったこと、考えたこと」「自分の経験やそのときの気持ち」などを発表する時間を意図的に設ける。学級全体が共通認識をもって話し合いに臨むことで、学級の課題を自分事として向き合うことができ、仲間の思いをより大切にすることができるであろう。

※1 学級会ノート

各自が自分の考えを整理するために、学級会に臨む前に作成するノート。

【仮説2】

振り返りやアンケートを活用したり、話し合いの場の工夫をしたりすることで、よりよい学級生活に向けて合意形成することができるだろう。

＜手立て3＞振り返りやアンケートの活用

合意形成を図ったうえで決定・実践した活動に対する自身の取り組みについて「振り返り」をしたり、学級がどれだけ目標を達成できているかを確認するために「アンケート」を実施したりする。生徒は学級会で決めたことの実践状況や成果を把握できるとともに、活動の継続の必要性や、新たな課題を発見することができるであろう。また、振り返りやアンケートを次時の学級会に活用することで、今の学級にとって話し合うべきことが明確になり、よりよい学級生活に向けた議題を設定することができるであろう。

＜手立て4＞合意形成に向けた話し合いの場の工夫

話し合いの際は、出された意見を整理し、似たような意見で分類することで、円滑に話し合うことができるように、「短冊」を活用する。これにより、出された意見が可視化され、生徒は多角的に意見を比べることができるであろう。また、意見の折り合いをつけやすくするために、「合意形成の方法」（新しい考えをつくる、意見を合わせるなど）を提示する。多様な意見を見比べることで、新たな視点や意見をもつ手助けとなり、多数決に頼らずによりよい学級生活に向けた合意形成を図ることができるだろう。

4 抽出生徒の設定

本研究では、生徒の変容を捉えるため、抽出生徒としてA男を取り上げる。A男の「学級会ノート」や発言、活動の様子などの資料を分析し、A男の変容を中心に追うことで手立ての有効性を検証していく。

A男は、仲間思いで協調性を大切にし、自分の意見をもっている。しかし、学級会で意見の対立に直面すると、感情的になってしまい、建設的な対話から離れてしまう傾向がある。また、自分の意見が決定事項に反映されないことに納得できず、その後の実践活動へつなげることができないことがあった。そんなA男に、学級会の中で合意形成の技術を身に付け、友達と意見交流をすることを通して、仲間の思いを大切にしながら、学級で決めた方策に納得したうえで、よりよい学級生活に向けて意欲的に行動しようとする姿を期待する。

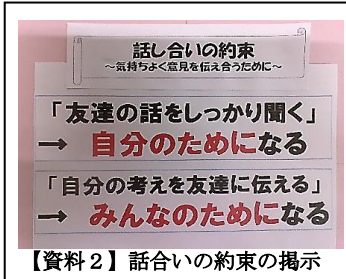
5 研究の実際と考察

（1）どんな学級にしていきたいか考えよう＜手立て①＞

年度当初、学級全員が同じ目標をもって、学級生活を送ることができるように、学級のめざす姿を話し合った。その際に、生徒主体で話し合いが進行できるように、学級のリーダー（以下、総代会）で司会グループを組織することとした【資料1】。話し合いではまず、事前に個人で考えた学級のめざす姿をグループで共有した。「全員が同じ目標に向かって力を合わせることができるクラスにしたい。」「何事にも全力で取り組めるクラスにしたい。」など、一人一人の学級に対する願いを伝え合うことができた。グループごとに練り上げためざす学級の姿を全体場で出し合い、まとめることとした。話し合いの際には、教室前方に「話し合いの約束（友達の話をしっかり聞く、自分の考えを友達に伝えるなど）」を掲示し、互いに安心して意見を伝え合うことを意識づけた【資料2】。A男は、「みんなが笑顔で明るいクラスをめざしたい。」という自分の考えを全体場で発言することができた。話し合いの結果、「全員が力を合わせ団結できるクラス」、「仲間と支え合い、助け合いながら、常に笑顔を絶やさないクラス」、「授業や普段の生活、学校行事など、あらゆる場面において全力で取り組むクラス」という意見に集約され、学級のめざす姿として掲げた。最後に、学級会で話し合ったことを自分事として捉えることができるように、学級会ノートに振り返りを書く時間を設定した。A



【資料1】学級会の様子



【資料2】話し合いの約束の掲示

第1回 学級会ノート

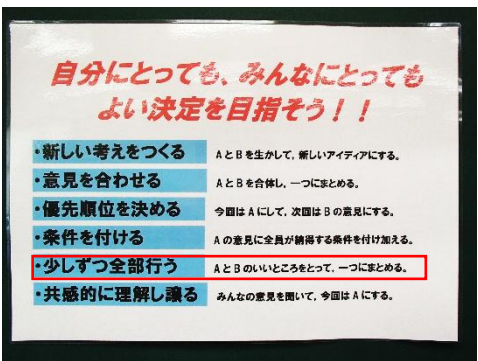
笑顔で明るいクラスにしたいという意見を発表しました。友達意見を聞いて、笑顔でいるために仲間と支え合ったり、助けあったりするクラスもいいなと思いました。

【資料3】A男の振り返り

男は、学級会を通して、友達の考えを取り入れて、自分のめざす学級の姿を具体的にイメージすることができた【前項資料3】。「話し合いの約束」を提示したことで、仲間の意見を受け入れるという意識をもつことができたと言える。

（２）学級の課題を解決しよう<手立て②・④>

めざす姿が明確になったことで学級生活が落ち着いてきたが、時間への意識が薄いとを感じる場面があった。学級の声や総代会での話し合いの中で、「年度当初に徹底していた『3分前入室・1分前着席』を再び守れるようにしたい。」「メリハリのある生活を送り、学級のめざす姿である『全力』を意識した生活をめざしたい。」という思いが出てきたため、「メリハリのある生活をしよう」を議題として選定し、学級会を行うこととした。事前に学級会ノート进行配付し、生徒一人一人が議題に対する考えを整理する場を設けた。ノートの記述から、7割を超える生徒が「時間への意識が薄くなっている」と現状を振り返っていたことから、学級の課題を自分事として捉えていることが分かった。学級会では、時間の意識が低下した原因を多角的に探るために、「なぜ時間が守れなくなってきたのか」について、自身の経験に基づいた意見交換を行った。「友達との会話に夢中で時計を見ていなかった。」「時間は気になっていたけど、周りの人が動いていなかったの自分もいいと判断してしまった。」など、学級の雰囲気から時間に対する緩みが生じていることを多くの生徒が挙げた。A男も、「時間を見て行動できていなかった。」と発言していた。次に、これらの原因を踏まえ、課題解決に向けた具体的な解決策を話し合った。活発に意見を出し合う様子が見られ、議題に対し全員が切実な思いをもっていることが分かった。話し合いの中で、「時間を守れない人を厳しく注意する」というルールを重視する意見と、「自分たちで気付くことができるような仕組みをつくる」という自主性を重視する意見で対立し、司会グループは多数決をとろうとした。そこで、「合意形成の方法」を掲示し、それぞれの意見に込められた思いを汲み取りながら、全員が納得できるように話し合うことを促した【資料4】。これまで多数決に頼ってきたため、新しい意見が出ず、話し合いが滞る様子が見られたが、議長が「合意形成の方法」の「少しずつ全部行う」部分を指さし、「お互いの意見のいいところをとってみましょう。」と提案した。この発言をきっかけに、少しずつ折り合いをつけようとする意見が出始めた。話し合いの結果、「時間になったら周囲の友達に優しく声かけをする。」「一人一人が時間に気付けるように、普段から意識して時計を見る。」という、互いの思いを取り入れた解決策に決定した。提示された「合意形成の方法」の視点が、折り合いをつけるための手助けとなったと言える。この決定に対して、A男は納得の表情を浮かべていた。学級会後のA男の振り返りから、自分の考えを伝えつつも、自分だけの意見に固執せずに仲間の考えを尊重しようとする姿勢が読み取れる。また、下線部の「一人一人の意見を大事にし、よりよい決定の仕方ができた」という記述から、多様な意見を比較・検討することで、新たな視点を取り入れ、よりよい解決策を友達と決めたことを実感していることが分かる【資料5】。



自分にとっても、みんなにとっても
よい決定を目指そう！！

・新しい考えをつくる	AとBを生かして、新しいアイデアにする。
・意見を合わせる	AとBを合併し、一つにまとめる。
・優先順位を決める	今回はAにして、次回はBの意見にする。
・条件を付ける	Aの意見に全員が納得する条件を付け加える。
・少しずつ全部行う	AとBのいいところをとって、一つにまとめる。
・共感的に理解し譲る	みんなの意見を聞いて、今回はAにする。

【資料4】合意形成の方法の掲示

【感想】(自分のがんばったところや友達のよかったところなど)
自分の意見を持つクラス会にみんなが参加することができた。特にこの場面は
賛成、反対してもよい場面が、また自分だけの意見をおしおすので
はがくみんなをみんなの意見を大事によりよい決定のしかたが
できたクラス会だったのかなと思いました。

【資料5】A男の振り返り

（３）協力してできる学級レクリエーションをしよう<手立て①・④>

学級のめざす姿である「全員が力を合わせ団結できるクラス」や「あらゆる場面において全力で取り組むクラス」に近づくために、総代会からの提案を受け、「学級全員が協力して楽しめるレクリエーション」を企画することとした。生徒主体の活動を促すため、教師からは使用可能な時間と場所のみを条件提示し、内容の決定や運営の方法については総代会に一任することにした。これを受け、総代会は事前にアンケートで種目案を募ったり、学級会における進行計画を立てたりするなど、話し合いに向けた準備を自発的に進めた。朝や帰りの会の時間を活用した話し合いの結果、種目はドッジボールに決まった。種目決定後の学級会では、「全員が協力して楽しめるドッジボールをしよう」という議題のもと、具体的なルールについて話し合った。提案理由の発表の場面では、総代会が「学級のめざす姿に近づくことができるように、全員で協力できるレクリエー

ションにしたい。」と思いを伝えた。話し合いでは、いかにして協力する状況を生み出せるかが焦点となった。「すぐに外野へ行ってしまうと、協力している実感がもてない。」といった不安の声や、「運動が苦手な人でも協力しながら楽しめるルールにすべきだ。」と学級の仲間のことを思いやる発言があった。これに対し、議長は「合意形成の方法」を提示し、挙げられている心配な面を解消しつつ、全員が協力を実感できる工夫について意見を求めた。提示された合意形成の視点を踏まえ、「ペアを組み、アウトも復活もともに行う『相棒ドッジ』であれば、ペアを守る場面が生まれ、自然と協力できる。」という意見が出てきた。A男は、全員が協力できるルールが出てきたことに同調し、賛成意見を述べた【資料6】。不安に感じている仲間の思いを自分事として受け止め、それを解消できるような意見をよりよい決定として価値づけていることが分かる。生徒主体の話し合いの場を設定し、「合意形成の方法」を提示したことで、仲間の思いに寄り添いながら、合意形成を図る経験を積むことができたと言える。

（４）体育大会に向けて、一体感のある学級パフォーマンスをしよう<手立て②>

体育大会の時期を迎え、学級ごとに披露する学級パフォーマンスの内容について検討する学級会を行った。まず、アンケートを実施し、学級としてどのようなパフォーマンスをめざしたいかを調査した。その結果、「団結」や「全力」に近づくために、「一体感」をテーマに掲げることが決まった。学級会では、『『一体感』のある学級パフォーマンスをしよう』という議題で話し合いが行われた。まずは、生徒が「一体感」を具体的にイメージしたうえで話し合いに臨めるよう、過去の先輩たちの実践映像を提示した。さらに、提案理由の発表の場面では、一人一人がイメージした「一体感」や、それを実現したい理由について発表する時間を設け、全体で共有を図った。話し合いでは、「全員がいかに揃っているか。」という技術的な統一感を重視する考えがある一方で、「やっていることは違っても、一人一人が役割を担い、組み合わせたときに一つのパフォーマンスになっている状態が一体感である。」という考えも挙げられた。A男は当初「全員で同じ動きを完璧に揃えることが大切だ。」と考えていたが、提案理由の場面で、「ダンスは苦手だけれど、自分なりの役割で貢献したい。」という仲間の切実な思いに触れたことで、自身の考えを改めて見つめ直した。学級会後のA男の振り返りには、仲間の考えを受け入れつつ、「一体感」に対する考え方を広げ、自分の考えをもったことが分かる記述があった【資料7】。提案理由の発表で思いを共有したことで、仲間の思いを大切にしよう意識することができたと言える。

（５）給食の時間を工夫しよう<手立て①・④>

学級生活において、給食の準備や片付けの際に、話をしている間に時間が経ち過ぎたり、食べ終わるのが遅くなったりするなど、時間に対する意識が薄れてきたことが再び課題として挙げられた。そこで、時間を意識した生活を定着することができるように、「13時にごちそうさまをしよう」という議題を選定した。まず、議題を自分事として捉えるために、現状に対する思いを全体に問いかけた。「給食の時間を守れていない」と判断した生徒が多く、「白衣を忘れたり、欠席したりする人がいたときに、当番がいなくなることがあるが、その空いた当番の仕事をする人がいなかった。」という反省の声があった。その一方で、「食べるのに時間がかかる人にとっては、会食の

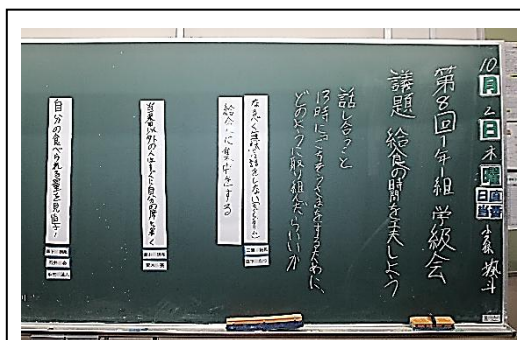
- C1：すぐに外野へ行ってしまうと、協力している実感がもてないと思います。
- C2：運動が苦手な人でも協力しながら楽しめるルールにしたほうがいいと思います。
- 議長：今のままでは得意な人だけが活躍して終わってしまいそうです。全員が協力できたと思えるような工夫はありませんか。
- C3：ボールを2個に増やすのはどうですか。投げるチャンスが増えれば、協力の場面も増えると思います。
- C2：それだと、結局得意な人同士でパスを回しそうです。
- C4：「相棒ドッジ」はどうでしょうか。小学校でやったことがあります。アウトや復活が二人一緒に、ペアを守る場面が生まれるので、自然と協力できると思います。
- A男：なるほど。「相棒ドッジ」なら全員で協力できそうなので賛成です。

【資料6】学級全体での話し合いの様子

第6回 学級会ノート

今まではそう思うことが一体感だと思っていたけれど、みんなの意見を聞いて、一人一人の個性が一つの形になることも立派な『一体感』だと気付きました。ダンスが得意な人も苦手な人も、それぞれが全力を出せる役割をつくれば、本当の意味で団結できるのではないかと思います。

【資料7】A男の振り返り



【資料8】短冊を使用した黒板記録

時間が足りない。」という切実な悩みも打ち明けられた。A男は、この意見に対し、「自分も話に夢中になってしまうことがある。でも、時間が足りなくて誰かが焦って食べるのはよくないと思う。」と発言し、仲間の思いを共感的に受け止めていた。次に、提案者から「ごちそうさまをする前には全員が自分の食器を戻し終えている状態をめざしたい。」という明確な目標が示されたことで、全員が共通の認識をもって、話合いに臨むことができた。意見を出し合う場面では、総代会が短冊を活用して意見を分類・整理した【前項資料8】。自分の考えと比較しながら、出された意見に対して、賛成や反対意見を述べたり、質問をしたりする様子が見られた。また、発言者のネームプレートを貼り出したことで、意見のつながりを意識し、付け足しをする発言も見られた。話合いの中でA男は、「自分の食べられる量を見直す」という提案をした。その理由は、「早く食べ終わることができれば、その分、残りの時間で友達と楽しく会食をすることができるから。」というものであった。これは、単に時間を守るという意識だけでなく、友達との関わりも保ちたいという自分の思いを大切にしながら、「13時にごちそうさまをする」ための前向きな折り合いのつけ方であった【資料9】。下線部のA男の発言をきっかけに、「無理に静かにするだけでなく、早く準備や片付けを済ませることができれば、会話を楽しむ時間も生み出せる」という考えも生まれ、学級全体で合意形成が図られた。最後に、提案者から「みんなで協力して、今回の学級会で決めたことに沿って一人一人が行動できれば、話し合った意味がある。」という感想が述べられた。全員が提案者に体を向けながら、真剣に話を聞く様子が見られ、一人一人が学級会で決めたことを意識し、学級生活の中で実践しようとする意欲を高めることができたと言える。また、総代会による円滑な運営と、議題を自分事として捉えたうえで合意形成による話合いの過程を経たことによって、仲間の思いを大切にしながら、自分たちの生活を自分たちでよりよくする方策を考えることができたと言える。

C1: 13時に「ごちそうさま」をするために、食事中は「もぐもぐタイム」にして、無言で給食を食べるのはどうでしょうか。

C2: それだと給食が楽しくなくなる気がします。友達と話す大事な時間だと思う。

議長: 「時間を守るために静かに食べる」という意見と、「楽しく会話をしたい」という意見で分かれています。他に意見がある人はいますか。

A男: 「自分の食べる量を見直す」がいいと思います。

議長: 量を見直すというのは、自分で減らすということですか。

A男: そうです。自分が13時までに確実に食べられる量に調節すれば、急いで食べなくても、残りの時間でみんなと楽しく話をすることができますと思います。

【資料9】学級全体での話合いの様子

(6) 合唱祭に向けて、学級でやるべきことを話し合おう<手立て①>

2学期の大きな行事である合唱祭に向け、学級では各パートに分かれた練習が始まった。A男はテノールパートのリーダーとして、仲間に声をかけたり、全体の場で積極的に発言したりするA男の姿が見られた。A男はパート内での話合いにおいて、パートメンバー全員の思いを込めた目標を決めることを提案した。給食の実践を通して「学級会で決まったことを全員が実践できている」と感じていたA男は、合唱練習においても、全員が納得できる目標を立てれば必ず実行できると考えた【資料10】。パート内での話合いにおいて、A男はパートリーダーとして、これまで掲示してきた「合意形成の方法」を意識して臨んだ。「もっと声を大きくしたい。」「音程が不安だからまずは音取りをしっかりとしたい。」などの意見が出た。これに対しA男は、「どちらか一方を選ぶのではなく、最初の10分を音取りに集中し、後半で思い切り歌う時間に分けるのは

第8回 学級会ノート

「13時にごちそうさま」をするために、それぞれが自分の量を調節したり、当番以外の人も進んで片付けたりする姿が当たり前になってきました。自分たちで納得して決めたことなら、やる気になって行動できると思いました。

【資料10】A男の振り返り

C1: 合唱祭まであと少しだし、もっと大きな声で歌う練習を増やして、迫力を出したいな。

C2: でも音程が不安な箇所があるよ。このまま大きな声で歌っても、音がずれていたら「一体感」はでないと思う。まずは音取りからすべきだよ。

A男: 二人の言っていることはどちらも大切だと思う。だからどちらか一方をやるのではなく、時間を分けて両方やるのはどうだろう。

C1: 時間を分けるってどういうこと。

A男: 例えば、最初の10分はピアノを囲んで徹底的に音取りに集中する。その代わり、後半の時間は思い切り声を出す練習にする。そうすれば不安もなくなるし、迫力も出せると思うけど、どうかな。

C2: それなら安心だね。自信もついて、後半には思い切り歌えそうだ。

C1: さっそく今日から始めてみよう。

【資料11】A男のパートでの話合いの様子

どうか。」と、互いの思いを踏まえた方法を提案した【前項資料11】。その後、全体の間では、パート内での意見を吸い上げ、「学級全体の『一体感』を出すために、各パートの仕上がり具合を共有し、教え合う時間をつくろう。」と提案した。生徒自ら課題を見つけ、話し合いによって解決を図ろうとする様子から、自発的・自治的な活動が定着してきたと言える。

(7) 活動を振り返ろう<手立て③>

これまでの活動を踏まえ、学級のめざす姿の達成度を確認し、3学期に向けた新たな見通しをもつ場を設けた。まず、事前に行った「学級生活に関するアンケート」の結果を提示した。1学期末と2学期末の結果を比較すると、「みんなで決めた学級目標に力を合わせて取り組んでいるか」「異なる意見や提案をよく聞いて、話し合いをまとめることができるか」といった項目において、肯定的な回答が増加した【資料12】。この客観的なデータを共有したうえで、個人で振り返りを行った。A男の振り返りから、学級のめざす姿に向けて意欲的に行動しようとする自分の姿を肯定的に捉えていることが分かる【資料13】。続いて、アンケート結果と個人の振り返りをもとに、「学級のめざす姿に近づくことができたか」を全体で話し合った。話し合いの中でA男は、「一人一人が声をかけ合うことで、以前よりもメリハリのついた生活が送れるようになってきた。」と発言し、日々の学級での生活の向上を実感している様子が見られた。このように、アンケートを活用し、取り組みの成果を可視化したことは、生徒自身が成長を実感し、実践意欲を高めることや、学級生活の課題を自分事として捉え直すことに役立ったと言える。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

ア 仮説1について

生徒主体の話し合いの場を設け、互いに考えを伝え合ったり、自分たちで取り組む活動を決定したりしたことで、仲間の思いを踏まえたうえで、よりよい学級生活に向けて話し合うことができるようになった。また、議題に対する自他の思いを共有し、学級の課題を自分事として捉えたうえで話し合いに臨んだことで、自分の思いをもちつつ、仲間の思いを大切にしようとする姿が見られるようになった。

イ 仮説2について

「振り返り」を活用することで、学級会で決めたことの実践状況や成果を把握し、活動の見直しや、学級の実態に応じた適切で新たな課題を見いだすことができた。また、話し合いの際に、「短冊」を活用することで、多角的に意見を見比べることができた。そして、「合意形成の方法」を提示することで、多様な意見をもとに、多数決に頼らずに折り合いをつけた話し合いを行い、合意形成を図ろうとする姿が見られるようになった。

(2) 今後の課題

話し合いでの合意形成を図る意識は高まったものの、学級会で決めたことを日々の学級生活で継続して実践する点には課題が残った。今後は、決めた方策を個々の生徒が意識し続けられるよう、定期的な自己評価や相互評価を組み入れて、実践や定着に向けた手立てを工夫する必要がある。また、単に意見の折り合いをつけるだけでなく、互いの考えを高め合い、より質の高い納得解へと練り上げる手立てを検討していきたい。

